

計4個検出された。うち1個は、雲珠着装のものである。他の3個は、ともに径5.6cmを計り、全て垂下用の方形立間を付ける。片面には、無数の珠文突起が並んでいる。

エ. 須恵器

方形及び三角形の段透しをもつ器台が4点、提瓶3点、横瓶2点、疋3点、高杯4点、杯が30セツ余り出土した。とくに、杯は何型式かに分類され、時期差が認められる。最も古いもので、6世紀前半頃に比定される。高杯についても、短脚太めのものと長脚一段透しのものがあり、時期差が考慮される。

オ. 装飾品

金環が1個、銀環6個の他、玉類が400個余り出土し、そのほとんどが石屋形内部から検出された。玉類では、水晶製切子玉8個、碧玉製管玉29個などが注目される。

5. まとめ

今回の発掘調査の成果はおびただしい。墳丘・石室・遺物すべてにおいて群を抜く。県下では有数の墳墓と言えよう。

以下、本墳の特徴と価値について簡単にまとめた。

1. 地山整形、2段築成盛土による前方後円墳である。
2. 塔穴式からの移行期の面影を顕著にもつ横穴式石室を埋葬主体とする。
3. 「石屋形」と呼ばれる県下初の遺体安置施設を玄室に内設する。九州地方との関連を思わせる。
4. 質量とともにすぐれた副葬遺物を埋納している。金銅製品のみごとき、須恵器・鉄製品・玉類の豊富さなどは目をみはらせる。
5. 本墳の築造時期は、6世紀前半と推定される。
6. 須恵器の時期差及び玄室内部の遺物出土状況などから、追葬の可能性が指摘できる。
7. 本墳の成立や性格を考える場合、一小地域にとどまらず、広く中央及び先進地域との文化的な結びつきを考慮した巨視的な視野が要求される。

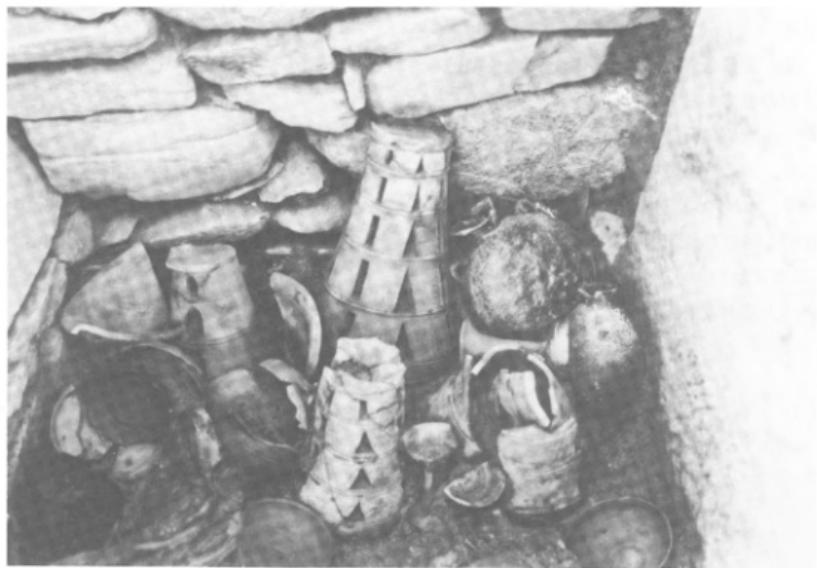
(森本)

（参考文献）

「王墓山古墳調査概報」 善通寺市教育委員会 1983



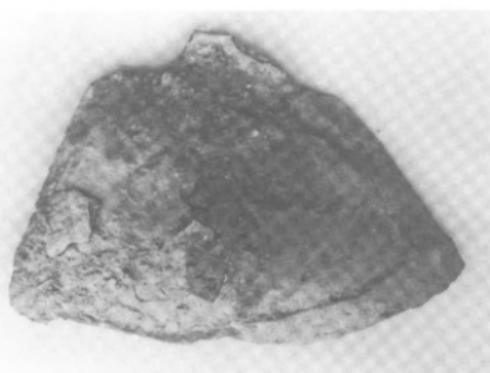
第2図 石室全景



第3図 須恵器出土状況



第4図
填丘版築状況



第5図
金銅製冠帽



第6図
馬鈴



第7図 器台



第8図 脚台付子持ち壺



第9図 f字型鏡板



第10図 剣菱形杏葉

雨滝城跡

1. 調査の経過

本城跡の発掘調査は、かつて、昭和45年に大川町教育委員会が実施している。それによると、西5郭で4間×5間の礎石を伴った建物跡が確認されている。さらに当所から大量の瓦も出土し、注目されていた。

今回の調査は、香川県教育委員会の指導のもと大川・寒川・津田の三町が「雨滝城跡発掘調査団」を結成、中部開発組合の援助を得て昭和57年2月14日より雨滝城跡の全容解明にのり出した。将来への保存を考慮し、最少限の発掘にとどめ、4月2日に現地調査を終了。調査報告書「雨滝城跡発掘調査概要」を刊行した。

2. 位置と環境

本城跡は、大川・寒川・津田町にまたがる雨滝山（標高253.2m）頂部一帯に所在する。

雨滝山は、裾野になだらかな丘陵をもって東西に広がりを見せており、8合目あたりから一段と急峻になっている。丘陵の大井古跡地区には濃密な弥生遺跡をはじめ、三角縁三神五獸鏡が出土した奥3号墳を中心として一大古墳群をも形成している。

雨滝山の東方には、火山（標高227.9m）が聳え、柴谷を間に対峙している。一方西方には丘陵が連なり、その裾を津田川が大きく迂回して津田湾に注いでいる。雨滝山麓が海浜部と内陸部を画すように連なっている。

3. 遺構

雨滝城跡は、山頂の本丸跡から略西・北・南の三方に派生した尾根上に郭が形成されている。本丸跡は、航空灯台や航空監視所が建っていたので遺構の残りは良くない。それでも、当所の西寄りには北西—南東に並ぶ礎石群が2列検出された。礎石間心々距離は90cm。8石が一列に並んでいる。他の列は移動しているようである。本丸跡の南東端の巨石群の外側直下に石組が15mにわたって本丸をめぐっており、その西側には石段がある。精査していないので往時のものかどうか現時点では断定できない。

本丸跡直下に500m²の西二郭がある。本城跡では最も広い郭である。礎石は7石が一直線に並んでいるのを確認、礎石間心々距離1.0m、その2m北に2石の礎石が平行に走っている。また、当郭の南寄りに礎石様の石が多数散乱しており、かなりの規模をもつ建物があったと想定され



第1図 雨滝城跡 (1:25,000)

る。

西二郭より3m余り下った所に170m²の狭い平場がある。本丸跡からは8m下った標高245mの所、西三郭である。今回の発掘調査を実施した内で最も礎石の遺存が良く、建物の規模が推定できる唯一の郭である。柱間寸法は、梁・桁共に2.0mほど東西棟建物で、2間×2.5間と想定される。

西四郭、50m²の非常に狭い平坦地である。礎石がL字状に並び、東西の礎石間心々距離1.0m、南北の礎石間心々距離は65cmと異っている。

当郭と西五郭の間に犬走りの取付部がありそこにも礎石があることから城戸跡と想定される。

北尾根の郭では、北二郭、北三郭と発掘したが、公園として開発していたため、礎石はほとんど抜き取られ、泉水等に利用していたので建物の規模等を知る資料を得ることができなかつたが、出土品については、むしろ他の郭より数量が多く注目される。

礎石以外では、西五郭の直下、標高227m本丸跡中心部から総延長120m、比高差26mの所に土壘状の遺構がある。現存する規模は、高さ、外法で約2m、内法0.5m、長さ10m。土石で積み上げている。

この土壘状遺構から幅1~1.2mの犬走りが尾根の南斜面を本丸へと登り、南尾根の郭を一周し再び本丸跡を通り、北尾根の郭へと連絡している。

南尾根の南二郭直下に尾根を切断した堀切状遺構がある。天端4m、深さ2m。隣接して、「のろし台」と称されている巨石が所在している。

4. おわりに

中世山城には珍らしく、多くの郭に礎石を配した建造物があったことは注目される。今回の発掘でも南二郭以外には礎石が遺存していた。中でも西三郭は良好で、建造物の平面プランが復元できることは、貴重な資料となる。

また、各々の郭によって柱間の寸法が異っている点も特徴的である。建物の用途、時期的なものなのか興味深い。さらに、瓦葺の建造物であるが、すべての建物に瓦を使用していたとは考えられないが、瓦が出土する郭が多く、西側斜面に相当数の瓦片が散乱している事を考えあわせると建物にはかなり手が込んでいる、周辺部への権威の誇示のためとも受け取れる。

建物以外の施設は簡素な城普請と考えられるが、山城は、自然地形と人工的構造物が一体となって、より効果的な機能が期待できるものである。その点から、本城跡は、大小様々な形状をした郭と、周辺の急峻な地形を巧みに取り入れ、あえて、人工的な構造物を必要としなかつたのである。

(伊沢)

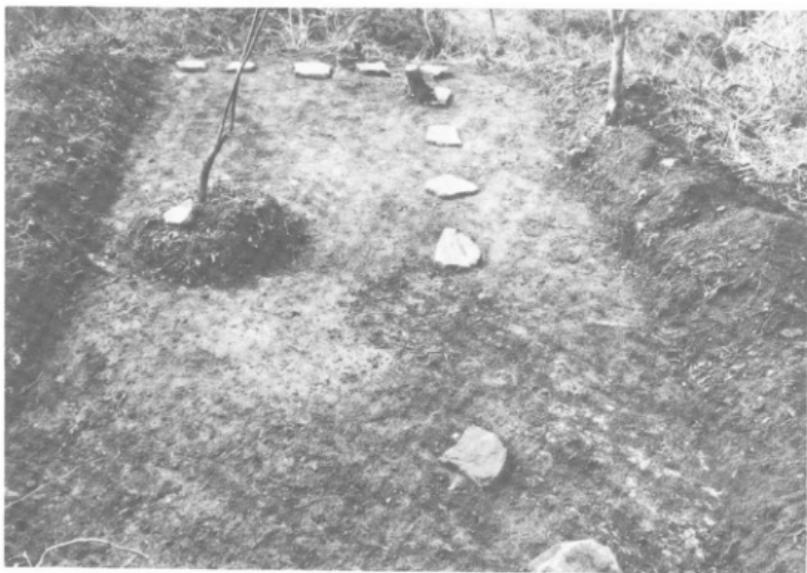


第2図 地形測量図（雨滝城跡）

第3図 本丸跡礎石群



第4図 西四郎郭礎石群



打 越 窯 跡

1. はじめに

綾歌郡綾南町十瓶山及び府中ダム・北條池周辺には、飛鳥時代から中世に及ぶ百数十基の須恵器窯跡・瓦窯跡が存在する。打越窯跡は府中ダム周辺の窯跡の一つで、群在する窯跡の最北端に位置する。当地を含めて、周囲一帯は密柑畑に開墾されている。遺跡の西方すぐ傍には、県道府中綾南線が南北に走っている。

ところで、打越窯跡から谷に沿ってやや東へ行くと、府中ダムの水際付近に平安時代前期頃の2基の須恵器窯跡があり、さらに、旧綾川を遡上すると、奈良時代前期の庄屋原窯跡や池宮神社南窯跡¹¹がある。また、綾川東岸から十瓶山・火の山にかけての洪積台地にも、窯跡・灰原が隣接し、一大窯跡群をなしている。

こうした窯跡の中で、打越窯跡は、最古の部類に属する窯跡として陶窯跡群の成立過程を考えるうえで重要視されて¹²きた。

ところが、最近、当該地において埋め立て造成作業が行われ、窯跡の破壊が予想された。このために、香川県教育委員会は地権者・工事請負業者との協議のうえ、坂出市教育委員会の協力を受けて、事前の緊急発掘調査を実施したものである。

調査は、昭和57年3月8日に着手した。斜面部トレンチ精査による窯体検出につとめたが、残念ながら確認するには至らなかった。けれども、灰原の検出及び膨大な量の須恵器の出土という一応の成果をおさめて、同年3月30日に終了した。

2. 遺構

打越窯跡は、府中ダムに向って東へ派生した尾根の北側斜面に構築されている。遺跡地は現在密柑畑となっているが、かつて密柑畑の造成時に窯壁破片や須恵器片が採集され、窯跡の存在が知られるようになった。

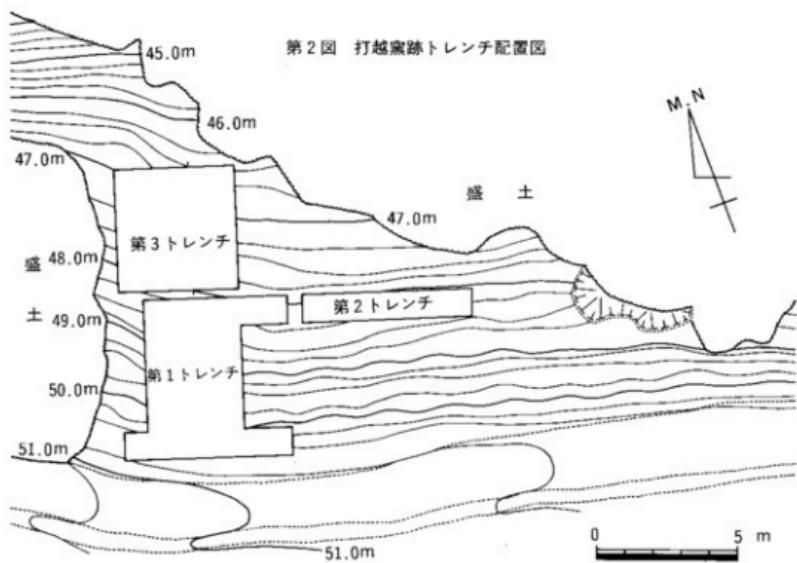
調査は、密柑畑を上下に区切る農道の下、ほぼ標高51.0mより下の斜面において実施された。調査時にはすでに埋め立て工事が進行していたが、灰原の主要部分は発掘することができた。

発掘調査の結果、窯体は発見できなかったが、第1・第3トレンチで、地表下約1.2mから厚い灰原が発見された。灰原の上部には、密柑畑造成に伴う盛土が厚く堆積し、盛土中からも多

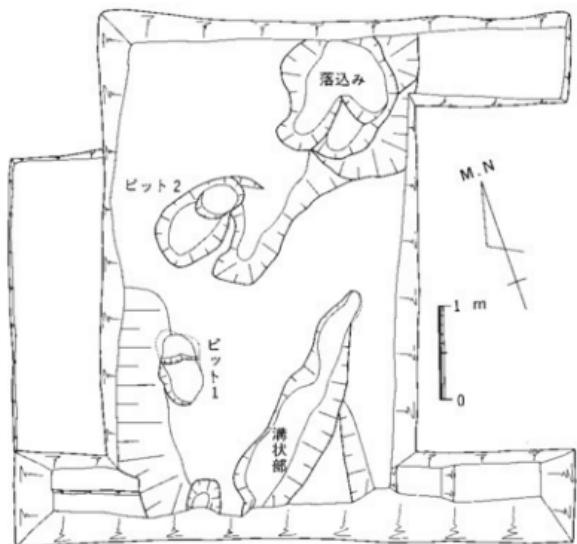


第1図 打越窯跡の位置 (1:25,000)

第2図 打越窯跡トレンチ配置図



第3図 トレンチ平面図



量の須恵器片・窯壁
片が出土している。

第1トレンチの中央部から第3トレンチの東部にかけて地山
が谷状に低くなり、
この部分の灰原は厚さ0.6~1mを計る。

灰原は、第1トレンチ・第3トレンチの
さらに西側へ広がる
が、この部分は地山
が高くなつて灰原が
薄くなるので、あま
り大きくは広がらな
いものと思われる。
一方、灰原は第2ト
レンチでは検出され
なかつた。

灰原はさらにいく

つかの層に分けることができるが、基本的には、7世紀前半~後半の須恵器を含む上部と、
7世紀後半の須恵器を含まない下部とに分けることができる。

灰原の広がりからみて、窯体は第1トレンチの上部(南側)にあるものと思われる。

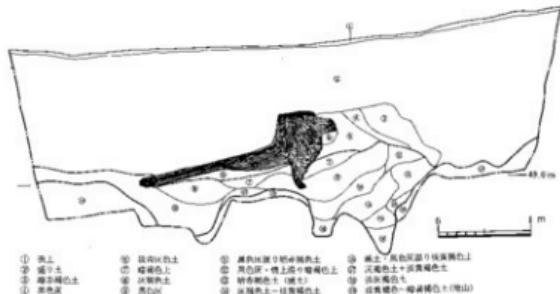
第1トレンチでは、灰原の下から、溝状構造・ピット・落込みなどが検出された。性格は明
らかではないが、灰や焼土を多く含み、ピット1・2では7世紀前半の遺物を出土した。

3. 遺物

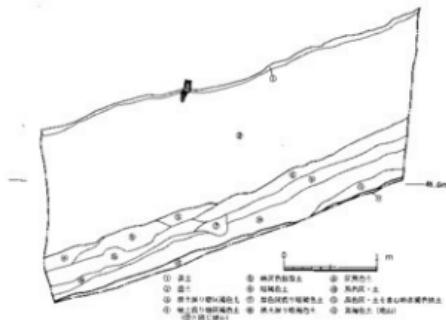
調査によって多量の須恵器と窯壁が出土した。須恵器は7世紀前半~後半のもので、杯・高
杯・盤・壺・甕・こしき・円面鏡などの器種を含む。それぞれの器種はバラエティーに富
み、特に、壺・甕には貼付文や把手、脚台・獸足などを持つものも多い。

第6図1は第1トレンチ灰原下部から出土したもので、かえりを持つ杯蓋としては最も古い。
杯身6・7などとセットになるものであろう。

杯蓋2は、8・9などの杯身とセットになるものと思われる。杯蓋のかえりは、端部からや
や内側に付けられ、1に比べて新しい傾向を示す。また、8・9の杯身の体部も、6・7に比
べて直線的に伸びる。



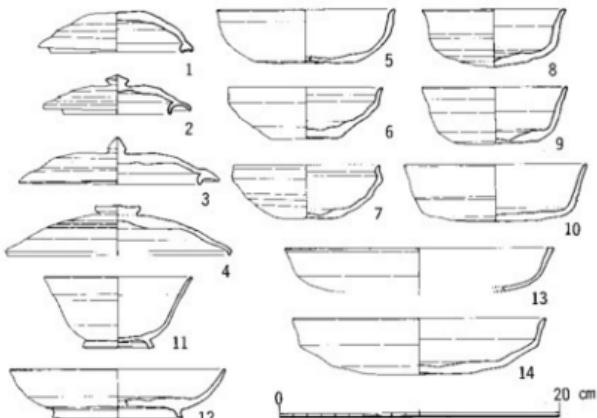
第4図 第1トレンチ南壁土層実測図



第5図 第3トレンチ中央部南北断面土層図

3は、かえりを持つ蓋としては大形で、10などとセットになるのである。10の外底面には「×」形のヘラ記号を持つ。

杯蓋4はかえりを持たず、12のような高台付杯身とセットになる。高台付杯身には11のような小形のものもある。いずれも高台は強く外方にふんばり、体部は、高台付近から大きく曲って立上っている。



第6図 打越窯跡出土須恵器実測図

5は杯身としたが、立上りを持つ杯身の蓋となるかもしれない。

13・14は盤で、直径18~19.2cm、深さ3~4cmを測る。

4. おわりに

打越窯跡の出土須恵器は、ほとんど整理を終っていないが、調査時の所見によれば、県内の他の同時期の須恵器に比べて、厚い自然釉を持つものが多いようであり、小形品の器壁は全体に薄く仕上げている。このことは、打越窯跡における整形技術・焼成技術とも優れていたことを示すものと思われ、のちに讃岐国の須恵器生産を独占する陶窯跡群の初期の窯にふさわしい内容をもつものとして注目される。

また、打越窯跡の成立については、坂出平野奥部の巨石墳との関連が考えられている^{註3}が、この地域の古墳出土須恵器との対比も今後の課題である。

(森本・渡部)

(註) 1. 香川県教育委員会『香川県陶邑古窯跡群調査報告』 1968

2. 渡部明夫「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』 1980

3. 森浩・「南海道の古代窯業遺跡とその問題」『日本歴史』 237 1968

普 及 活 動

広く一般の方々に…

昭和57年度埋蔵文化財調査の普及活動から

近頃では、"埋蔵ラッシュ"とでもいえるほどに、各地の調査成果が毎日のように新聞・テレビ等で報道されている。発掘調査を契機として、次々に現代に甦ってくる先人たちの足跡には、その時代・時代の様相がよく現われており、先人たちの息吹きすら伝わってくる。それだけに、歴史を綴る新たな知見や大きな感動を与えてくれるものが多い。

確かに、一般の方々が種々の報道を通じて埋蔵文化財に対する関心を強め、理解を深めていく動向は喜ばしいことである。ただ、華やかな報道の舞台に登場するのは、やはり限られたものであるから、それに何倍かする発掘調査が全国各地で行われていることも忘れてはならない。香川県でも、このところ毎年20件余を数えるようになり、瀬戸大橋建設に伴う海峡部調査や四国横断道建設に伴う調査など大規模調査が増えている。しかし、そのほとんどが開発工事等に伴う事前の緊急発掘調査であるところに決して喜べない実情がある。そこでは遺跡の記録保存が優先しがちで、調査が進めば工事も進むという、まことに皮肉な状況が待ちうけている。著しい開発の波の中で危機にさらされている埋蔵文化財、なるほど厳しい現実ではあるが、先人たちの貴重な遺産である埋蔵文化財を継承・発展させていくことは、わたしたちの大きな務めである。

香川県教育委員会では、昭和57年度も「埋蔵文化財の保護と開発」という相対する命題に立ち向いながら、各種の遺跡調査や保存整備、普及活動などに取り組んだ。ここでは、調査事業や遺跡の概況を広く一般の方々に周知するとともに、文化財保護精神の啓蒙をはかることを目的として実施した普及活動の幾つかを振り返ってみたい。

① 「語りかける埋蔵文化財—香川の埋文調査から一」の発行（第7～17号）

発掘調査の現場では、検出する遺跡の状況や調査にかける調査員の思いなど日々に変化している。そうした調査員の実感をこめた調査概要をできるだけ早く、わかり易くお知らせする手立てとして昭和56年9月から毎月1回「語りかける埋蔵文化財—香川の埋文調査から一」(B4版1枚)を発行してきたが、昭和57年度末で第17号を数えることになった。いわば、速報的な意味をもたせた調査月報であり、調査概要に加えて現地説明会・資料展示等の行事案内、調査補助作業員のコメントを紹介するなど紙面の構成に工夫を試みている。これまででは報道関係資料として利用されることが多かったが、今後はより広く一般の方々にも配布することができ、その主旨が満足されるよう努めたい。

② 「語りかける埋蔵文化財—備讃瀬戸の島々III」の発行

遺跡調査の成果を網羅した調査報告書は、学術的に過ぎるということはないにしても、一般には親しみにくいものであるようだ。このため、53年度より各年度の調査事業や遺跡調査のあ

らましを取りまとめた本調査年報を発行しており、7年目を迎えた海峽部埋蔵文化財発掘調査事業においては、調査で甦りつつある島々の歴史を写真・図版構成を中心とした『語りかける埋蔵文化財・備讃瀬戸の島々III』(43頁・500部)を54年度のI、56年度のIIに引き続いだ発行した。この小冊子は、調査の成果を「目でみる備讃瀬戸の歴史」(旧石器時代～古代・中世)に仕立てたもので、幸い一般の方々には好評であり、特に調査地の島嶼部住民への配布を心がけてきた。

③ 埋蔵文化財資料展（第I～III期）の開催

ここ数年来、調査報告書の作成を通じて整理された出土品その他の調査資料を順次、白梅会館1階展示室（高松市天神前4-10）において公開している。会場も狭く、調査事業の合間を縫っての開催であるから、毎回行き届いた展示内容であるとはいひ難い。それでも、毎年継続的にII～III期、各期2ヶ月前後の開催を図ってきたので、この資料展も漸く一般の方々に定着してきたように思える。57年度の展示は、次のとおりであった。

| 期 | テ　ー　マ | 会　期 | 観　覧　者 |
|-----|-------------------------------|-----------------|-------|
| I | 親子で学ぶ昔の暮らし 旧石器～弥生時代の遺物を中心に | 57.7. 1～57.9.10 | 320人 |
| II | 米作りが始まったころ 丸亀市中の池遺跡の発掘調査から | 57.11. 1～58.1.8 | 203人 |
| III | 遺跡が語る海の交易 瀬戸大橋ルートの発掘調査から | 58.2.21～58.3.30 | 294人 |

資料展はあくまでも幅広い、多数の一般観覧者を期待して開催するものであり、一層その主旨に沿って展示内容に工夫を加えていきたい。

④ 発掘調査現地説明会の開催

57年度も、各発掘調査の現場では調査にまとまりを得た時点をとらえて現地説明会を開催し、検出した遺跡の状況を直接参会者にお知らせする場面を設けた。参会者ご自身が先人たちの創意と工夫に満ちた生活跡を認められ、遺構や遺物を通してその時代の様相を汲み取っていただくことを期している。特に、地元の方々が地域の埋蔵文化財に対して理解を深める一つの手掛かりになれば、まことに幸いである。57年度に実施した現地説明会は、次のとおりである。

昭和57年度 埋蔵文化財発掘調査現地説明会

| 年 | 月 | 日 | 調査遺跡名 | 説明の要点 | 担当者 | 参会者概数 |
|----|----|----|-------------------|---------------------------------|------------------|-------|
| 57 | 5 | 26 | 綾南町・西村遺跡 | 住居跡6棟と出土遺物 | 渡部明夫 | 120 |
| | 8 | 7 | 国分寺町 讃岐国分尼寺跡 | 寺域西部を画する溝と出土遺物 | 大山真充 | 30 |
| | 9 | 5 | 長尾町・川上古墳 | 円墳の堅穴式石室と出土した短甲・骨など | 大山真充 町教委・亀井芳文 | 320 |
| | 9 | 4 | 丸亀市 青ノ山8, 9号古墳 | 8号墳の特性と青ノ山古墳群の形成 | 東原輝明 | 60 |
| | 10 | 24 | 高松市・鶴尾4号古墳 | 最古式の積石塚前方後円墳・4号墳の特性と石清尾山古墳群の形成 | 渡部明夫 | 80 |
| | 11 | 20 | 三木町・西土居古墳群 | 円墳・1~3号墳の箱式石棺と出土遺物 | 渡部明夫 | 130 |
| | 11 | 20 | 長尾町・丸井古墳 | バチ形状の前方部と堅穴式石室 | 大山真充 | 30 |
| | 12 | 4 | 寒川町・中尾古墳 | 円墳の横穴式石室と出土遺物 | 東原輝明 | 120 |
| 58 | 2 | 19 | 白鳥町・白鳥廃寺跡 | 塔基壇と推定寺域 | 大山真充 | 20 |
| | 2 | 26 | 津田町・岩崎山5号古墳 | 箱式石棺と出土遺物、津田湾岸の古墳群 | 東原輝明 | 20 |
| | 3 | 8 | 坂出市・櫃石島の遺跡 | 瀬戸大橋建設に伴う遺跡の発掘調査から櫃石島の原始・古代を見る | 林正弘 安田和文 | 70 |
| | 3 | 17 | 坂出市 瀬戸大橋ルートの遺跡 | 瀬戸大橋建設に伴う島々の遺跡調査から備讃瀬戸の移り変わりを見る | 松本豊胤 秋山忠・真鍋昌宏 | 90 |

⑤ 埋蔵文化財発掘調査報告会（第5回）の開催

各年度の調査事業や遺跡調査の概要などを広く一般の方々に周知することを主目的とした埋蔵文化財発掘調査報告会も第5回を迎えた。丸亀市教育委員会の共催を受けて、昭和57年10月9日丸亀市総合会館において開催した報告会の次第は、次のとおりである。

13:00~13:40 第1部「調査報告」

1. 最近の発掘調査 渡部明夫

2. 海跡部の発掘調査 秋山忠

13:45~16:00 第2部「丸亀の原始・古代」

1. 弥生時代 藤好史郎

2. 古墳時代 東原輝明・真鍋昌宏

3. 歴史時代 松本豊胤

「調査報告」では、昭和56~57年度にわたる緊急・確認調査や大規模な受託調査などの最近の動向を、遺跡の概要・調査上の課題等をおまりせながら報告した。57年度調査の概況については、本書巻頭に掲載している。

さて、今回の報告会は、開催地の丸亀市域における発掘調査の成果を踏まえて地域の原始・古代史の展開に迫ろうとしたところに特色がある。その意味で、第2部「丸亀の原始・古代」が報告会の焦点であった。藤好は、丸亀市金倉町に所在する中の池遺跡の発掘調査（56年度）を紹介し、検出した三本の大溝から遺跡が弥生時代前期に属する環濠集落跡と推定されること

を説き、併せて丸亀平野における米作りが始まったころの様相を概説した。次いで、東原は、土器川・大東川水系の丸亀平野東部を生産基盤とした青ノ山古墳群について、青ノ山6～9号墳、宇多津5号墳などの既調査の成果を抑えながら、その形成の跡をたどってみせた。中でも、6・8号墳（前者51年度・後者57年度調査）のL字形横穴式石室という特異性を強調した。また、真鍋は、青ノ山南面の山麓部で発見された青ノ山1号窯（54年度調査）を取り上げ、それが花崗岩の岩盤を割り抜いた全地下式無段の登り窯であり、県下でも古い段階（6世紀末～7世紀初頭）に入る須恵器窯として古墳群中に存在することなどの特徴を指摘したうえで、古墳群と須恵器窯の有機的な関係（副葬品の須恵器供給、造墓と工人支配の首長権力など）について論じた。そして、松本は、古文献に則して那珂郡条里を復元しながら、東の鶴足郡・西の多度郡における条里制施行を示し、さらに近隣の遺跡分布や古代寺院址の在り方とその年代に検討を加えて、古代の丸亀平野での農業生産がどのように開拓されていったかを多角的な視点でとらえた。

以上のような展開によって、「丸亀の原始・古代」に焦点を合わせた報告会の意図は、一応満足されたと考えられる。しかし、まことに残念なのは、当日の参会者が100名たらずであること。会場を満たす参会者が得られなかつたことで、会全体の盛り上がりに今一步の感を与えたことは否めない。この点、次回に向けて、会の主旨を再確認し、その内容構成や事前の開催通知について十分な配慮を払わなければならない。

（秋山）



第5回 埋蔵文化財発掘調査報告会

文化行政課埋蔵文化財調査担当者名簿

課長 遣藤 啓
 主幹兼課長補佐 林 茂
 副主任幹 松本 豊胤

〔文化財調査〕

| | | |
|------|------|------|
| 調査一係 | 主任技師 | 東原輝明 |
| | 技師 | 安田和文 |
| | 〃 | 松野一博 |
| | 〃 | 西岡達哉 |
| | 職員 | 神明子 |

〔庶務〕

| | |
|----|-------|
| 係長 | 下河芳樹 |
| 主査 | 加納覺 |
| 主事 | 前田和也 |
| 主事 | 酒井幸子 |
| 職員 | 久保美栄子 |

| | | |
|------|------|------|
| 調査二係 | 係長 | 秋山忠 |
| | 主任技師 | 渡部明夫 |
| | 〃 | 藤好史郎 |
| | 技師 | 小西正行 |
| | 〃 | 真鍋昌宏 |
| | 嘱託 | 安藤一 |
| | 〃 | 坂口淳子 |

昭和58年度 転・退職者

| | |
|------|----------------|
| 筆川高美 | (県立普通寺養護学校校長) |
| 小国史郎 | (県教委総務課主任主事) |
| 建畠一子 | (県教委保健体育課主事) |
| 森本義臣 | (高松市立下笠居小学校教諭) |
| 林正弘 | (高松市立龍雲中学校教諭) |
| 田村雅彦 | (県企画調整課嘱託) |
| 増田正伯 | (退職) |
| 玉城一枝 | (〃) |

| | | |
|------|------|------|
| 調査三係 | 係長 | 伊沢肇一 |
| | 主任技師 | 岸上康久 |
| | 〃 | 廣瀬常雄 |
| | 〃 | 池内右典 |
| | 〃 | 大山真充 |
| | 技師 | 野中寛文 |
| | 〃 | 薦田耕作 |
| | 所長嘱託 | 石塚徳治 |
| | 嘱託 | 河野裕 |
| | 〃 | 片桐孝浩 |
| | 〃 | 中本雅之 |

香川県埋蔵文化財調査年報
昭和57年度

昭和58年8月
編集発行 香川県教育委員会
高松市番町4丁目1番10号
電話（0878）31-1111㈹

印刷 有限会社 成光社
高松市郷東町5番地11
電話（0878）82-1476㈹